

2025. 7. 27 (日) 使徒24:1~9

24:1 五日後、大祭司アナニアは、数人の長老たち、およびテルティロという弁護士と一緒に下って来て、パウロを総督に告訴した。

24:2 パウロが呼び出され、テルティロが訴えを述べ始めた。「フェリクス閣下。閣下のおかげで、私たちはすばらしい平和を享受しております。また、閣下のご配慮により、この国に改革が進行しております。

24:3 私たちは、あらゆる面で、また、いたるところでこのことを認め、心から感謝しております。

24:4 さて、これ以上ご迷惑をおかけしないために、私たちが手短かに申し上げることを、ご寛容をもってお聞きくださるようお願いいたします。

24:5 実は、この男はまるで疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者であり、ナザレ人の一派の首謀者であります。

24:6 この男は宮さえも汚そうとしましたので、私たちは彼を捕らえました。

24:7 【本節欠如】

24:8 閣下ご自身で彼をお調べくだされば、私たちが彼を訴えております事柄のすべてについて、よくお分かりいただけると思います。」

24:9 ユダヤ人たちもこの訴えに同調し、そのとおりでと主張した。

<説教>

使徒パウロは、イエス・キリストを信ぜずパウロに敵対するユダヤ人たちによってエルサレムで捕らえられ、何度も殺されそうになりながら、ローマ帝国の千人隊長の手によって救い出されてきました。それに業を煮やしたユダヤ人たちがパウロを暗殺しようという陰謀を企てたことが千人隊長に知らされました。それで千人隊長は二人の百人隊長に命じてパウロを馬に乗せ(24)、総勢 470 人の兵たち(23:23)によってパウロを守らせ、最終的には 70 人の騎兵たち(32)によってパウロをカイサリアに護送しました。そうやってパウロはローマ帝国の総督フェリクスのところへ連れて行かれ、そこで裁判を受けることになりました。「パウロが訴えられているのは、ユダヤ人の律法に関する問題のためであって、ローマの法律に関しては死刑や投獄に当たる罪はない」。そう千人隊長は分かっていた(29)。そしてパウロを訴えているユダヤ人たちには、彼のことを総督の前で訴えるように命じていました(30)。その命令に従って、〈五日後、大祭司アナニアは、数人の長老たち、およびテルティロという弁護士と一緒に下って来て、パウロを総督に告訴し〉ました(24:1)。この総督の前での裁判の様子が 24 章に記されています。

〈パウロが呼び出され、テルティロが訴えを述べ始め〉ました(2)。テルティロはギリシア語も話すことができるユダヤ人で、ユダヤ人の律法にもローマの法律にも詳しく、法廷でも原告被告どちらの代理人としても自分を雇った側に有利になるよう論述できる雄弁な〈弁護士〉だったのでしょう。果たせるかな彼はまず丁寧に総督の統治のすばらしさを称賛し、感謝を述べ、総督の寛容を願うのでした(2-4)。もっともそれは当時のプロの「雄弁家」の演説法としては普通のことでもあったようです。実際、当時は「パクス・ローマーナ(ローマの平和)」と言われた時代でもあり、ユダヤ人の多くが「それなりに」ロー

マ帝国の支配を受け入れてはいたようです。そんなこともあり、テルティロの言葉は全くのおべんちゃらというものでなかったようです。

さてそれに対して、パウロを訴えたユダヤ人たちのパウロに対する憎しみ、殺意は相当のものでした。テルティロはパウロの罪状をあげつらいました(5-6)。これは要するに、せっかく総督のおかげでユダヤ人たちの間にも〈すばらしい平和〉が実現しており、〈この国に改革が進行しております〉のに、パウロはそのローマ帝国の「臣民」たるユダヤ人たちを混乱させ、延いてはローマ帝国の治安を乱す者、ローマ帝国にとっても害悪でしかない者だということです。

まず〈この男はまるで疫病のような人間で、世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者であり、ナザレ人の一派の首謀者〉だと言います(5)。最近では世界中で新型コロナウイルスの感染が大流行しましたが、そんな疫病のような人間だと言うのです。当時すでに紀元前の時代から、ペストやマラリアといった〈疫病〉が時々流行し、猛威を振り、多くの人々が悩まされるということが起こっていました。ギリシアもマケドニアもそしてローマでも疫病の流行がありました。現代のように医学が発達していなかった時代、原因不明の病が恐るべき早さで広範囲に広がり、人々がばたばたと死んでいく様は恐怖でしかなく、疫病は憎むべきもの、嫌うべきものでしかありませんでした。ユダヤ人たちにとってパウロは〈疫病〉に例えるに相応しい者でした。そんな、放っておいたら害悪を拡大するような者だから捕らえ、殺してしまうべきだと訴えたのです。

パウロが持っている害悪とは〈世界中のユダヤ人の間に騒ぎを起こしている者〉であることでした。もちろんその騒ぎの原因は、ダマスコの〈諸会堂で「この方こそ神の子です」とイエスのことを宣べ伝え始めた〉(9:20)、〈イエスがキリストであることを証明〉した(9:22)ことに始まる福音宣教です。その後パウロはエルサレムだけでなく、小アジア、更にはギリシアでも福音を宣べ伝え、行った先々でイエス・キリストを信じる者の集まりを残して来ました。コリントでは〈一年六ヶ月の間腰を据えて〉伝道しました(18:11)。またエペソでは約3年間伝道し、〈アジアに住む人はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた〉のでした(19:10)。こうしてパウロはユダヤ人にイエスがキリストであると教え、そうやってユダヤ教徒の数を減らし、キリスト者を増やして行きました。更にはイエス・キリストによって異邦人までもが救われて神の民とされると教え始めたのでイエス・キリストを信じようとしないうダヤ人たちにはますます脅威となり、生かしておいてはならない者となりました。なお、かつて〈クラウディウス帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命じた〉(18:2)ことがありました。ある歴史家は「クレストスの扇動でユダヤ人たちが騒動を起こしたため」としています。こんなことも実はパウロのせいだったとテルティロは言わんばかりでした。

テルティロはパウロが〈ナザレ人の一派の首謀者〉だと主張しました。〈ナザレ人(複数形)の一派〉とはナザレのイエスをキリスト(メシア)と信じる者たちのこと、またはイエス・キリストの福音のことです。メシヤと自称して〈は、近ごろ暴動を起こして、四千人の暗殺者を荒野に連れて行った、あのエジプト人〉(21:38)を撃破したのが総督フェリクスでした。ですから、パウロはあれと同じような暴動を企むグループの首謀者である、故に同じように有罪とし処刑すべきだとテルティロは訴えたかったのでしょう。

そして〈この男は宮さえも汚そうとしました〉と言いました。神殿の関係者は〈大祭司〉

たちであり、彼らはローマ政府に協力的でした。そんな自分たちに敵対するパウロはローマ政府にもきつと反逆するに違いないとテルティロは訴えたかったのでしょう。

そして〈閣下ご自身で彼をお調べくだされば、私たちが彼を訴えております事柄のすべてについて、よくお分かりいただけると思います〉(8)と自信満々な調子で言いました。また、〈ユダヤ人たちもこの訴えに同調し、そのとおりだと主張し〉(9)ました。しかしそんなユダヤ人たちの訴えが真実であると、ユダヤ人たち自身、その「良心」に照らして考えていたのだろうかと思います。彼らがパウロを総督に訴え、処刑してもらおうとしたた本当の理由は、自分たちユダヤ教から「信者」が〈ナザレ人の一派〉に引き抜かれ後退し、一方イエスがキリストであるという福音がユダヤ人だけでなく異邦人にまで宣べ伝えられ、キリスト教会が前進していることに対する嫉み・憎しみ以外の何ものでもありませんでした。それはイエス・キリストご自身が総督ピラトのもとで裁判を受けることになった理由とも本質的に同じでした。どうして彼らがこんな一見威勢がよさそうで、しかし実は中身のない訴えをしたのでしょうか。それは彼らの「神信仰」はイエス・キリストのない「神信仰」だったからと言うほかありません。イエス・キリスト抜きで信じる神は本当の神ではありません。

私たちはイエス・キリストによって、イエス・キリストを通して、真の神を知り、信じるのです。そして〈キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受け〉(Ⅱテモテ 3:12)るのです。イエスに似た者として、イエスと同じように。